

生活科マップ・暦作成の意義についての考察

著者	杉能 道明
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要．人間生活学・児童学・食品栄養学編
巻	39
号	1
ページ	142-150
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000063/

生活科マップ・暦作成の意義についての考察

杉能 道明[※]

Study about the Meaning of a Life Environment Studies Map and Calendar Creation

Michiaki SUGINO

"Independence" has been valued in Life Environment Studies from those days when Life Environment Studies was founded in 1989, with the aim to cultivate the basics of independence. "Collaboration" and "creation" are important for a child, too. I think that we should review Life Environment Studies as a subject that is important for children, and we should address in meeting the issues of education targets, contents, and evaluate.

Twenty-six years ago, Life Environment Studies was created. A Life Environment Studies map and calendar flourished at each school, but now, revision is needed. What is the significance of a Life Environment Studies map and calendar? How does it lead to "independence"? In the lecture "Life Environment Studies instruction method", each student makes a Life Environment Studies map and calendar, and write their impressions. I investigated the work and the impressions of these students.

I found that children's interests are raised if the teacher knew the area, and found local teaching materials, and showed it with the children.

Key words : Life Environment Studies map and calendar, independence, collaboration, creation

I. 研究の目的

本研究の目的は、生活科マップ・暦作成の意義について考え、これからの変化の激しい時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力の育成につながる活用の仕方を探究することにある。

II. 研究の方法

研究の方法は次の通りである。

- ① 資料を手がかりに、これからの変化の激しい時代を生きる子どもたちに必要な

資質・能力について考察する。

- ② 文献を手がかりに、生活科マップ・暦の意義について考察する。
- ③ 学生の作品・感想を手がかりに生活科マップ・暦の意義について考察する。
- ④ ①②③をもとに、新しい生活科マップ・暦の活用の仕方を提案する。

III. 研究の内容

1. 育成すべき資質・能力とは何か

現行の小学校学習指導要領が告示されて6年になる。学習指導要領は約10年で改

キーワード：生活科マップ・暦、自立、協働、創造

※ 本学人間生活学部児童学科

訂されるので、折り返し地点を過ぎたことになる。次期学習指導要領に向けての検討も始まった。「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」（平成26年3月31日取りまとめ）では、育成すべき資質・能力について「自立した人格をもつ人間として、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力を育成する」（下線：筆者）とされている。例として、「主体性・自律性に関わる力」「対人関係能力」「課題解決力」「学びに向かう力」「情報活用能力」「グローバル化に対応する力」「持続可能な社会づくりに関わる実践力」などを重視することが必要だと述べられている。キーワードは「自立」「協働」「創造」である。

この中の「自立」は、平成元年に生活科が創設された当時から生活科で大切にされて続けてきたキーワードで、2回の改訂を経ても変わらない、生活科の本質の部分である。生活科の目標の中にも「自立への基礎を養う」という言葉があり、生活科の主要なねらいを示している。生活科の自立は、次の3つの自立を意味している。第1は、自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できるという「学習上の自立」である。第2は、生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわることができるようになり、自らよりよい生活を創り出していくことができるという「生活上の自立」である。第3は、自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことができるという「精神的な自立」である。

「協働」は、友達とかかわり合いながら

学ぶことである。現行の学習指導要領では、生活科の「内容及び内容の取扱いの改善」の中で、「伝え合い交流する活動の充実」が挙げられた。活動や体験をその場限りで終わらせるのではなく、一層の充実を図る観点から、言葉などを中心としたコミュニケーション活動を通して、体験したことを他者と情報交流することを目指した「生活や出来事の交流」を新たな内容(8)として位置づけた。これは、言葉などを使った言語活動は、思考を促し、他者とのコミュニケーションを成立させ、情緒を安定させることにつながることから、言語活動の充実を意図したものである。言語活動によって他者と交流して認め合ったり、振り返りとらえ直したりすることを重視したものである。また、気付きの質を高める指導方法の工夫の1つにも「伝え合い交流する場を工夫する」が示された。互いに伝え合い交流する活動は、集団としての学習を高めるだけでなく、一人一人の気付きを質的に高めていく上でも意味があるとしている。

「創造」は、具体的な活動や体験を通して、身近な人々、社会及び自然とのかかわり方を工夫したり、気付きの質を高めていくことである。例えば、生活科の内容(6)では、身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくるという具体的な活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付き、みんなで遊びを楽しむことができることが述べられている。

こうして見てくると、「自立」「協働」「創造」はいずれも、生活科の中で育成できる力だと考える。今一度、子どもたちの「自立」「協働」「創造」の力をつける大切な教科として生活科を見直すべきだと考える。

2. 生活科マップ・暦作成の問題点

生活科が生まれて26年になる。生活科

創設当時、各学校で盛んに作成されていた生活科マップや暦が、今、あまり作成・改訂がなされていないようである。どうしてなのか。何名かの学校現場の先生のお話を聞く中で、理由について考えてみた。

- ・学校現場が多忙で生活科マップ・暦を作成・改訂する時間的な余裕がない。
- ・低学年の担任の仕事として限定的にとらえられており、負担が大きい。
- ・生活科マップ・暦を過去に作成しているが、改訂していない。
- ・地域の教材が確立され、教材開発の必要性を感じていない。
- ・教科書で具体的な活動や体験が紹介されているため、作成の必要性がない。
- ・生活科マップ・暦の意義が理解されていない。

等が考えられる。

3. 生活科マップ・暦作成の意義

生活科マップ・暦作成の意義は何か。

現行の小学校学習指導要領解説生活編によると、「第2節 年間指導計画の作成」の「2 地域の環境を生かす」に、生活科マップ・暦について次のような記述がある。

地域の環境を調査して見出した学習の素材や人材、活動の場などを、例えば、生活科マップや人材マップ、生活科暦などとして整理し、有効に活用することは大切なことである。（下線：筆者）

つまり、子どもにとって生活の場であり学習の場である地域の素材や活動の場などを見出したり、教材化して最大限に生かすために生活科マップ・暦を作成することが大切だということである。次のような留意点も書かれている。

しかし、これらを固定的にとらえ、変化を見逃すようなことがあってはならない。1年間という時間の経過によるものだけでなく、絶えず地域の環境は変化するものである。季節や時刻、毎日の天候や気温などによって、身近な自然とともに、地域の人々の暮らしの様子や人々の動きも変化する。したがって、既に一度作成された生活科マップや人材マップ、生活科暦なども絶えず見直し、指導計画の充実に生かして柔軟に活用できるようにしておくことが大切である。（下線：筆者）

生活科の創設にかかわった中野（1991）は、「生活科教育の理論と方法」の中で次のように述べている。

生活科は、児童の生活圏を学習の場とし、学習の対象とする教科である。そのため、生活科への取り組みに当たって、児童の生活圏である地域環境の理解と活用は、不可欠の重要事である。児童が生活している地域環境の理解とその活用なしには、生活科は展開できないからである。（下線：筆者）

生活科では、学校が置かれた地域環境、児童の通学区を中心に調べることが、つまり、教師が地域理解をすることが大切だということである。生活科の創成期には、具体的な活動や体験につながる素材を見出し、教材を開発するためにも、生活科マップ・暦の作成は喫緊の課題であったと考えられる。次の記述からも伺うことができる。

生活科の学習に有効な素材がどこになるか、それは、いつごろ、どのような活用ができるかなど、素材の探索である。例えば、いつ、どこにどのような花が咲き、実をつけるか、昆虫などの動物は、

いつごろ活動を始め、どこでそれを観察できるか、近くにある公園はどんな公園か、お祭りなどの地域の行事には、どんなものがあるか、季節によって人々の生活はどのように変わるか、児童に昔の遊びについて話のできる人が近くにいるか、児童がよく出会う人にはどんな人が、どこにいるかなど、地域の素材を開発することが求められるのである。(下線:筆者)

4. 生活科マップ・暦の作成

(1) 講義「生活科指導法」での生活科マップ・暦の作成の課題

担当科目「生活科指導法」では、学生に生活科マップ・暦の作成の課題を出している。概要は次の通りである。

- 課題：生活科マップ、暦の作成・提出
- 作成期間:3週間(平成26年4月24日(水)～5月14日(水)、学生が自宅に帰省することが考えられるゴールデンウィークを作成期間に重なるよう配慮した)
- 留意点：生活科マップは模造紙1枚にして(複数枚を1枚につないでもよい)、たたんで提出。必ず、裏に学籍番号、氏名、感想(200字程度)を記入して提出。生活科暦は模造紙・画用紙いずれを使ってもよい。大きさも自由。

事前指導の流れは次の通りである。

- ① 生活科マップ、暦のよいところを見つける。
- ② 生活科マップ、暦作成の意義を理解する。
- ③ 生活科マップ作成の手順を知る。
- ④ 生活科マップ作成上の留意点を知る。
- ⑤ 生活科暦作成上の留意点を知る。

①生活科マップ、暦のよいところを見つける、では、先輩たちが昨年度までに作成した生活科マップ、暦を観察しよい点を見

つける活動を取り入れた。4～5名のグループに生活科マップ、暦をそれぞれ1作品ずつ配布し、それを見て考える活動にした。学生は、口々に「うわー」「すごい」などと感嘆の声をあげながら、色使いや構成のよさやかかれている内容の豊かさに気づいていた。作品を観察することで、生活科マップ・暦作成の見通しをもつことができたと考える。

②生活科マップ、暦作成の意義を理解する、では、前述の小学校学習指導要領解説生活編の「第2節 年間指導計画の作成」の「地域の環境を調査して見出した学習の素材や人材、活動の場などを、例えば、生活科マップや人材マップ、生活科暦などとして整理し、有効に活用することは大切なことである。(下線:筆者)」の記述を根拠に、地域の環境を調査し学習に生かすためであることを確認した。

③生活科マップ作成の手順を知る、では、手順の一例として次の内容を示した。

- 1 資料等を通して、地域の特色を示す人的環境、社会的環境、自然的環境について下調べをする。
- 2 マップの範囲を決める。(部分的に拡大するのはよい。)
- 3 下調べを生かして、実際に調査する。(現場で直接)
 - ・人的環境：商店の人、農業に携わる人、消防署・公民館等の公共施設の人、地域の歴史に詳しい方等。
 - ・社会的環境：公園、公民館、駅、河川敷、郵便局、商店街等。
 - ・自然的環境：野原、海辺、草木(開花・結実の時期)、小動物等(活動の時期等)

※現場に足を運び、インタビュー、写真、スケッチ等で記録する。

- 4 調査結果を整理し、適切なものを選択する。

- 5 生活科マップの中に、道路や、名称や、その特徴を表す絵、写真、説明を位置付ける。

④生活科マップ作成上の留意点を知る、では、次の内容を指示した。

- ひとりで模造紙1枚のマップをつくり、提出する。(たたんで)
- 原則として自分の出身校の低学年の子どもが対象になるものにする。
- 子どもがマップを見て、行きたくなる、見たくなる、したくなるようなものにする。
- 学習指導要領の内容に照らして作成する。
- 適切な範囲を決めることが大切。
- 北を上にしてかく。(社会の地図の学習と関連)
- いろいろな工夫(色、扉、吹き出しなど)をして、見て楽しいものに。
- 吹き出しを入れて説明するとよく分かる。吹き出しには、課題や説明を入れる。情報量に注意。
- 字の大きさや太さにも工夫が欲しい。ひらがなで書くか、漢字には読み仮名をつける。(低学年の子どもが読めるように)
- 写真や実物を入れるのもよい。
- 人的マップを作成してもよいが、個人情報保護の観点から、あまり勧めない。
- 道路は、太さ、直線か曲線か、信号、横断歩道などの特徴をはっきりさせて。
- 焦点化したマップでもよい。例えば、「市場マップ」「川マップ」「城下町マップ」「私の通学路マップ」「総合運動公園マップ」
- 作成者の生活科観を入れる。作成者

の個性や出身校・地域の特徴を出す。

- 指導計画の作成に生かせるとよい。
- マップに入りきらないものは資料集に。しかし、大きなマップにも写真や説明をつけておくのがよい。(作成した感想も入れて。)

⑤生活科暦作成上の留意点を知る、では、次の内容を指示した。

- 生活科暦の作成は生活科マップの作成と表裏一体の関係。
- 生活科暦では学校や地域における生活を1年間の時系列でとらえ、子どもの生活を把握できるようにすることが重要。
- そのため、次のような観点から調査・整理する。
 - ① 学校の行事(入学式、身体測定、夏休み、運動会、冬休み、卒業式等)・・・出身校のHPで分かることも
 - ② 地域の行事(交通安全週間、敬老の日、祭り、正月、節分等)・・・二十四節気も関連
 - ③ 子どもの生活・遊び(虫取り、水泳、サッカー、草花遊び等)
 - ④地域の自然(桜の開花、梅雨、セミ、モミジや銀杏の紅葉、カマキリの卵、初氷等)
- 目的(ねらい)や願いをもつてかく。例えば、自然暦とか食べ物暦など。
- 学習指導要領の内容に照らして作成する。何をどのように載せるか。
- 作成者の生活科観を入れる。作成者の個性や出身校・地域の特徴を出す。
- 絵や写真を入れるなど、いろいろな工夫を。
- 4月始まりで。
- 飼育動物や栽培植物は、できるだけたくさん載せておき、その中から選択

させるか？それとも、何か（地域の特産等）に限定してそれについて詳しく紹介するか？

- 栽培→収穫→？（何をする？食べる？遊ぶ？つくる？）
- 低学年の子どもにグラフはよめるのか？（算数では2年で○グラフの指導、棒グラフは3年、折れ線グラフは4年で指導）

(2) 生活科マップ・暦を作成した学生の感想

平成26年度は、受講者81名全員が生活科マップ・暦を作成し、提出することができた。

生活科マップ・暦には、作成しての感想を200字程度で記入することになっている。学生の主な感想の例は次の通りである。

（学生A）

行ったことのある場所でも、その場所の昔の出来事や名前の由来など知らなかったこともありました。ここ何年か足を運ぶことができていない場所もありました。しかし、とても小さな町ですが、地域の伝統を大切に守りつづけていて、この町に住んでいることを誇りに思いました。マップをつくることで、改めて地域のことを調べることができ、特色や伝統を知り、この町がもっと好きになりました。

（学生B）

マップをつくるということで、自分の学区を改めて詳しくみることができました。道を1本にして見やすくしました。花を紹介することで、子どもたちに季節を味わってもらえるかなと思いました。あと、色を多く使うことで、見た目から入っていけるようにしました。

（学生C）

自分の家から小学校の周辺のマップをつ

くろうと思い、とりかかりました。自分が小学校のとき歩いていて楽しかったこと、今分かる危険なところや親から気を付けなさいと言われていたことを思い出しながら改めて地元を見ることができ、なつかしいような新鮮な気持ちになりました。私が小学生のときにはなかった道ができていたり、お店ができていたり、あった家がなくなっていたり、この10年ほどでも、大きく変わっていることがわかりました。子どもたちが地域の自然やイベント、食べ物に触れながら安全に散歩できるようにということ意識してつくりました。とはいえ、地域はどんどん変わっていくし、毎日そこを歩く子どもたちだから見つけられる楽しみが必ずあるので、子どもたちにはその時々自分なりの楽しみを見つけながら歩いてほしいと思いました。

（学生D）

生活科暦を本のようにすることで、子どもたちが楽しみながらページをめくれるようにしました。「ふう太くん」というキャラクターの1年を見ることで、1年の流れをつかめるようにしました。月の花も写真ではなく、色画用紙でつくすることで、あたたかさを出すようにして、暦に対して抵抗感なく入っていけるように工夫しました。

（学生E）

暦をかきながら季節の移り変わりを感
じることができました。陰暦の由来は知らなかったもので、調べてみて、なるほどな、と意味を理解できました。季節の歌の中に出てくる花も、どんな花なのか知ることができた暦になったのではないかと思います。季節のおとずれを私たちが実感するのは、季節の花を見たときだと思います。今後、花を意識的に見て、季節を感じたい。

(学生F)

児童が1年の見通しがもちやすいように、自分の学校で行われている行事と、地域で行われているイベントを書いた。地域で行われているイベントは、私の知らないものもあり、こんなにたくさんあるとは驚いた。児童たちにも、たくさん知ってもらい、たくさん参加してもらいたいと思った。また、季節の花もかいて、自然を通して、季節を感じられるように工夫した。イラストもかき、低学年の児童にも分かりやすいようにした。(下線：筆者)

学生AやCやEは、下線のように、「誇りに」「もっと好きに」「新鮮な気持ちに」「季節の移り変わりを感じる」などを書いており、地域への愛着を感じたり、自ら地域の自然を意識していきたいという内容を書いている。子どもが生活科マップ・暦を作成することで、同様の意識をもつことが期待できると考える。また、学生BやCやDやFは、下線のように、子どもの視点を意識して、工夫した点や子どもへの思いを書いている。将来教育に携わる上で大切な視点だと考える。また、この生活科マップ・暦を作成する活動が、学生が教師の立場を意識する上でも有効な活動であることを示しているとも考えられる。

生活科マップ・暦を作成する上での留意点がある。1つめは、絶えず見直すことである。学生Cも書いているが、地域の環境は絶えず変化するので、見直しを行い、指導計画の充実に生かして柔軟に活用できるようにすることが大切である。2つめは、低学年の子どもの理解力を考えることである。教師がつくる場合は特に、未習の漢字に読み仮名をつけたり、グラフについては未習のものが多くを配慮して、視覚的に大小や全体の高低がとらえられればよしと考えることが大切だと考える。小数や地

図記号も未習なので、配慮が必要である。また、地域によっては季節の訪れが異なるため、二次資料を調べるだけでなく、実際に地域の現場で一次資料を手に入れることが必要になってくる。

生活科マップは特に、教師の足で地域を調べる地道な素材の掘り起こしが必要である。学生には、現場で調べることを徹底してもらった。「地域の自然」「地域の施設」に分けて作成すると分かりやすいが、子どもは環境を一体としてとらえることが多いため、活動のきっかけとなることを期待する生活科マップは、人、自然、施設などが混在している場合もあってよいと考える。

5. 生活科マップ・暦の活用と育成したい力との関係

生活科マップ・暦は、平成元年の生活科創設当初は、地域の環境を調査し活用するために、各校で積極的に作成された。生活科の教材を見出し、教材化するため、そして、地域の環境を生かした年間指導計画を作成するためである。場合によっては、教師の教材研究として位置付けられ、子どもには示されないこともあったと考えられる。しかしながら、これからの生活科マップ・暦は、子どもの「自立」「協働」「創造」のために積極的に活用されるべきものだと考える。

現在の小学校の現場で、生活科マップ・暦を作成する際、どのように学習に活用すべきなのだろうか。主として2つの活用方法があると考ええる。

- ① 教師がつくり、提示する場合
- ② 子どもがつくり、交流する場合

である。①の場合は、教師が生活科マップ・暦を作成する。子どもが見るものであることを意識して作成することが必要になる。子どもの興味・関心を高め、活動への

見通しや意欲をもたせることがねらいとなる。つまり、具体的な活動や体験のきっかけとなる興味・関心・意欲を高めるためである。②の場合は、子どもが見つめてきた気づきを生活科マップ上に位置づけたり、生活科暦にまとめたりすることになる。この活動の中で、「自立」「協働」「創造」の子どもの姿が期待できる。まず、生活科マップ・暦をグループで作成する活動が考えられる。子どもが作成する（創造）場合は、友達と協力し、役割を分担しながら資料を集める活動（協働）の中で、自分の役割を果たし（自立）、地域に愛着をもつことが期待できる。また、一人一人の気づきをマップや暦に位置づける活動（協働）の中で、子どもの気づきを高め（自立・創造）たり、伝え合い交流する力を高めたり（自立・協働・創造）することが期待できる。

Ⅳ. 研究のまとめ

生活科マップ・暦は生活科創設の平成元年当時は、各学校で競うように作成されていた。ところが、今は作成や改訂作業はあまりされていないようである。生活科創設当時の生活科マップ・暦作成の意義を考えたとき、「地域の素材を見出し、生活科の教材化を図る」という重要なものであった。しかしながら、今、その意義は弱くなっているようである。

現在、学校現場は多忙を極めている。生活科マップ・暦は作成すべき意義があると考えたとき、低学年の一部の教師だけに負担を強いるのではなく、学校全体の先生方の協力や地域の方々の協力も得ながら、作成・見直しをしていくべきだと考える。そのためには、生活科マップや生活科暦を、第3学年以上の総合的な学習の時間や社会科や理科の学習と関連付けたり、安全指導という視点で学校全体で共有できるもの、複数の学年共通のものをつくることにすれ

ば、低学年の担任以外の先生方の協力が得やすいのではないかと考える。

今、次期指導要領に向けての改訂作業が始まっている。「自立」「協働」「創造」のキーワードも見える。生活科では目標の中にも「自立」を入れて創設当時から重要なねらいとして位置づけてきた。生活科マップ・暦を作成することで、子どもの興味・関心・意欲を高めて具体的な活動や体験を促したり、生活科マップ・暦をつくる活動を通して、気づきの質の高めたり、思考力・判断力・表現力を育てたり、地域への愛着をもったりすることが期待できる。生活科マップ・暦の作成は子どもが「自立」「協働」「創造」の力をつけていくことにもつながると考える。いま、生活科マップ・暦作成の意義を見直す時にきているのかもしれない。

更に、現在、低学年の子どもが学校の登下校や放課後に事件や事故に巻き込まれるニュースが頻繁に報道されている。子どもを取り巻く環境の変化を感じるとき、生活科マップを安全指導に活用することがより求められるようになってきていると考える。生活科についての「改善の具体的事項」にも、「通学路の様子を調べ、安全を守ってくれる人々に関心をもつなど、安全な登下校に関する指導の充実に配慮する。」とある。

今後は、生活科マップ・暦作成・改訂の実態調査をしたい。また、生活科マップ・暦を活用した授業づくりに取り組んでみたい。

引用・参考文献

- 文部省（1989）「小学校指導書生活編」，教育出版
- 中野重人（1991）「生活科教育の理論と方法」，東洋館出版社
- 文部省（1999）「小学校学習指導要領解説生活編」，日本文教出版
- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領

解説生活編」，日本文教出版
原田信之ほか（2011）「気付きの質を高める生活科指導法」，東洋館出版社
文部科学省（2014）「育成すべき資質・能力

を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会―論点整理―」，
文部科学省